『語学教育研究論叢』第28号

中学校検定教科書の多角的分析

小室　俊明

Analysis of junior high school textbooks and their influence on english language learners

Toshiaki Komuro

To understand the problems of low proficiency university students, we need to understand how they have learned English. Many teachers at university level are not aware of how it is being taught today and still believe that it is basically the same as when they were students. This paper examines the actual texts and tasks of all six kinds of officially approved English textbooks (18 volumes altogether) that are currently being used in Japanese junior high schools and discusses their features and possible influences on students. It finds that the textbooks are no longer as grammar- or translation-centered as they had once been, but rather full of listening and speaking activities. Then this paper moves on to discuss the possible causes of why, in spite of these major changes, the students are still unable to communicate effectively aurally in English.

序

大学生の英語力の低下が、大学での英語教育に深刻な影響を与え、これまでの方法が成立しなくなっている、またかろうじて成立しても効果が以前のようにあがらないという問題は多くの大学英語教員に共通の悩みであろうと思われる。

この傾向は年々深刻になり、be動詞と一般動詞の区別など英語の仕組みの基本的なことや中学で学習する基本単語すら理解できない学生が出ている。この状況がどのような原因で起こるかははっきりしていなく、漠然と「ゆとり教育が悪い」などと言われている。しかし今の大学生が実際にどのような英語教育を受けて来たかかという実態の正確な認識がなければ有効な対策を考えるのは難しい。

大学教員側のその点の認識は、年齢の高い教員ほど現実とかなり違ったものになっているように思われる。自分が受けた英語教育の印象が強く、今の学生も同じような英語教育を受けているという錯覚があるものと思われる。現実には筆者が私立中学校で英語授業を担当していた1982年４月から1988年３月までの教科書と比べても大きな変革が行われている。この点教員だけでなくしばしば日本の英語教育について、「文法中心・英文和訳中心」であるとの批判が聞かれるがこれも同様の錯覚から来ていると思われる。

そこで本論には次の2つの狙いがある。

1．英語担当教員でも「英語教育を専門分野としていない大学英語教員」（＝日ごろ中学の教科書を目にする機会が少ない）に対し、大学生が中学でどのような英語教育を受けているかという実態の認識が得られるように、全検定教科書６種類の３学年分を分析してその内容や活動の傾向をまとめる
2．今の大学生の英語力と教科書の特徴との関係を考察し、英語力向上のためのヒントを模索する

教員は「教科書を教えるのではなく、教科書で教える」と言われるように、教科書だけではわからない教育の実態があるのは明らかである。しかし実際に教室で行われていることは教員によって個人差も多く、アンケートなどを行っても必ずしも現状が反映されないこともあるし、教科書が与える影響はやはり大きいので第一歩として教科書から始めることとした。

1．検定教科書とは

現在の教科書検定制度は、1947年に制定された学校教育法に基づいて始まった[1]。それまでの国が教科書を作るシステムから、民間の出版社が教科書の執筆を著者に依頼し、それを文部省（現文科省）に提出し、同省の審議官が学習指導要領に照らし適切な内容であるかを審議する検定を行い、修正意見などを付して承認するもの。承認を受けた教科書[2]は公立中学などで採択される。

平成22年（2010年）度現在使用されている中学の英語教科書は平成17年（2005年）度の検定を通ったもので[3]、教科書は次の６種類[4]ある。（各学年用に１・２・３とあり、計18冊）（詳しいデータは巻末を参照）

1．NEW HORIZON ENGLISH COURSE（以下 HORIZON）
2．SUNSHINE ENGLISH COURSE （以下SUNSHINE）
3．TOTAL ENGLISH （以下TOTAL）
4．NEW CROWN ENGLISH SERIES New Edition（ 以下CROWN）
5．ONE WORLD English Course（以下ONE WORLD）
6．COLUMBUS 21 ENGLISH COURSE （以下COLUMBUS）

中学の英語検定教科書はすべてB5版サイズで、表紙から本文までカラー写真やカラーイラストが豊富に使われ、字間や絵の前後のスペースに余裕があり（したがって見やすく、「ぎっしり詰まっている」＝難しい という印象を与えないようにしていると思われる）、生徒が楽しく読めるように工夫されている。（筆者が中学校勤務時のモノクロ中心で、線のシンプルなイラストのものとはまったく印象が違う）

本論ではまず大きく「本文」と「課題」に分けてその特徴を見ていき、その後に文法がどのように扱われているかを見ていくこととする。

2．検定教科書「本文」の特徴

すべての教科書に共通している大きな特徴は、３学年に渡って本文が「会話文」中心で成り立っていることである。特に１年生用の教科書にその傾向が強く、導入時にはCOLUMBUS を除いて、登場人物の絵のふきだしに英文が入っているマンガ方式をとっている[5]。後半に入ってもONE　WORLDの９課を除くと、巻末に近いreading用に特に割り当てられた部分[6]に地の文があるくらいで、ほぼ会話文１色と言ってよい。

２年生用になって少しずつ会話文でないものも混ざってくるが、その場合でも短い説明（手紙やE-mailの場合もある）＋会話文のような形を取ることが多く、依然として会話文が多い。またReading セクションのものは少しずつ長く、内容も少しだけ深くなってくるが「選択」とか「Ｓpecial Program」「付録」などと表記されていて飛ばす教員がいることを想定している印象がある。

３年生用になると地の文の部分はさらに増えるが、会話文も随所に残っている。

少しまとまった地の文もReadingセクションなどに出てくるがせいぜい500word 前後のものが多い[7]。

まとめると今の中学英語検定教科書の本文は会話文が大勢を占め、当然口語英語表現がほとんどで、会話のturn-takingが頻繁に起こることから文は短く、あまり複雑な内容や深い思考は表現されることが少ない。この傾向の影響については後述する。

次に使用された語数を見ると、学習指導要領で1989（平成元）年［1993（平成５）年施行］）で必修507語であったものが、1998（平成10）年［2002（平成14）年施行］で必修100 語に、新語も1,000から900語程度に減り、それに伴って全体的に教科書の語数も少なくなっている。1988年と現在のHORIZON３年間の異語数と述べ語数の合計を比べた長谷川他（2008）（p. 52）によれば、異語数は834から728に106語減り、延べ語数は7,725から6,148と1,577語減っている[8]。この総語数の少ない問題については後述する。

本文のおもしろい工夫としてはTOTALに点字を扱った課があり、そこの

点字部分は実際に手で触れたらわかるように点が浮き出るような印刷になっている。

3．検定教科書の「課題」の特徴

課題も前述の中学校勤務時の教科書と比べて大きく変わったことの一つである。以前は文法の穴埋めや書き換え問題、英文和訳の問題が多かったが、そうした種類の課題は今ではほとんどなくなり、代わって多くなったのはまずリスニング課題である。HORIZONを除く５種類の教科書は毎課ごとに複数のリスニング問題があり、その上にリスニング用の短いセクションが付いているものもある。HORIZONは課のリスニング問題は少なく、ない課もあるがその代わりにリスニング専用のリスニング・プラスというセクションが中１で５つ、中２で７つ、中３で６つあるので遜色はない。「問題」は内容を聞いて、それに適合する絵を選んだり、起こる順番を答えたり、本文との正誤をたずねるなど、理解することを前提に作業をするタイプのタスクである。

これだけでも１年を通して毎週かなりのリスニングの問題をこなすことになり、これにALTとの授業でALTの英語を聞くことが加わり、後述するペア・ワーク、グループ・ワークなども自分が話すと同時に相手の言っていることを聞くことになるので以前とは比べものにならない量のリスニングをこなすことになる。

次に多く見られるのが、ペア・ワークやグループ・ワークなどの相手に英語で質問して答えを得て課題を解くもの。COLUMBUSとTOTALは二人でするPAIR WORK、数人で行いGROUP WORK、クラスの複数の人と話すCLASS WORK と言う名前を前面に出しているが、残りの教科書は特に断わりなく、個別に「ペアで話してみよう（対話してみよう、会話してみよう）」とか「クラスから～を探してみよう」のような形式にしているが実態は同じである。ONE WORLDのように誰とするか指定がない「説明してみよう、話してみよう、教えよう」も恐らくペアやグループで行うこともかなりある

と思われるので、この仲間に入れてもよいかもしれない。いずれにせよ自分から口語で発信して、それを相手が聞き取るというタイプの課題は以前にはほとんど見られないか、まれにあっても授業では扱わないことが多かったが、教科書を見るとそうした話す課題がかなり日常的になっていることがわかる。

リスニングや英語を話すタイプのものに比べれば頻度は低いが、ライティングの課題も随所にある。ここでの大きな特徴は、ほとんどが「手紙、e-mail,メモなどを完成させる」、あるいは、「例を参考に自分なりのものを書いてみよう」「～の続き（返事）を書いてみよう」という自分である程度内容を考えるタイプのものがほとんどで、和文英訳問題はどの教科書にも見当たらなかった。以前は英語授業におけるライティングと言えば和文英訳が定番だったことを考えると、これも大きな変化である。

リーディングの問題はリスニングやスピーキング、ライティングと比べると数が少ない。読み物に対して、英問英答をするもの、日本語での質問に答えるもの、絵の順番を本文と同じにするもの、本文について書かれた文の正誤を選ぶものなどがある。ここでも英文自体の訳を問うような問題はない。

その他教科書間に共通はしていないが、多彩な課題や練習があるので代表的なものをいくつか紹介する。最も多様な課題が用意されているのはCOLUMBUSで

＊Shadowing－連続して流れる英語音声を聞きながらワンテンポ遅れて声に出して繰り返してついていくもの。（通訳の基礎訓練で行われているもので、英語教育でも取りあげられている活動）

＊Read and Look Up-教科書の文を１行見て、目をあげて（教科書を見ないで）書いてあったことを声に出して言う。（ここではペアで、相手役が正しく言えたかの確認役を務める）

＊Human Tape Recorder－４人１組で行う。２人が英語の台詞（教科書の会話文）をお互いに向かって声に出して言うのだが、その二人は教科書を見ないで、２人の背後に立ったそれぞれの相方の２人が教科書を見ながら、最初の２人の耳元に小声で台詞

をささやいて、それを前の二人が大きな声でお互いに言う活動。

＊Mini-Drama－４人１組になって教科書の会話文の役を割り振って、それぞれの役に特定の感情を指定して（eg. Hiro-angry）演じさせる活動。

＊Inner Voice－６人１組で行う。３人には教科書の会話文の役を割り振り、声に出して、読んでもらうのだが、各自の台詞を言った直後に、相方の３人がそのときの話者の気持ちを想像して日本語で声に出して言う活動。

以上は３年間で繰り返し出てくる。他にも１度だけの活動として次のものがある。

＊Find the Mistakes-２人１組になって、１人が本文の何ヶ所かを変えて読み、もう１人がどこを変えたか当てる活動。

＊Gesture Game－１人がカードの入った封筒から１枚引いて、それに書かれていた動作をジェスチャーで再現して、それを数人が何をしているか英語で当てる。（Group Workの１つとして）

＊Show and Tell-大切にしているものを絵や写真を見ながら友達に紹介する活動。聞いている生徒はその内容をメモに取る。（これはTOTAL２やHORIZON３になどにもある）

他にCROWNでは「英語とカタカナで音節の数が違うことを比べる課題」、「教科書の登場人物になったつもりで、他の登場人物を紹介する課題」、「微妙に違う２枚の絵の違いを見つけて、英語で指摘する課題」、TOTALでは過去・現在・未来の予想で自分について書かせる『自分史』の課題」、HORIZONには「reading, writing, speakingを組み合わせた『Multi Plus』」、ONE WORLDでは「選んだ単語の絵を描いて、その絵を手で隠して少しずつ見せながら相手に当てさせる課題」（ONE WORLDは他にも英語の情報を絵にするものがいくつかある）、SUNSHINEには「登場人物になったつもりで会話をする課題」など興味深いものが色々ある。またディベートも取り上

げられている。

4．文法の取り扱い

以前の教科書とのもう一つの特徴的な違いは文法の扱い方である。第一の大きな特徴は文法の説明が各課ごとにではなく、数課終わってからまとめて出てくることである。であるからかなりページ数を経てからでなければ文法の説明は出てこない。中１用で見ると、一番早いHORIZONで20ページ、以下TOTAL　22ページ、SUNSHINE　25ページ、COLUMBUS 34ページ、ONE WORLD 40ページ。(CROWNに至っては本文中にはなく巻末の付録に１課から９課までに出てくる文法の説明がまとめてあるのみ。) したがって当然次の説明までの間隔は長い。また回数もページ数も少ない。その際の説明も簡略で、問題が付いていないものもあるし、付いていても２～４問と少数である。以下簡単に各教科書別に掲載ページや合計ページ数、傾向や問題及び巻末のまとめのあるなしなどの情報をまとめる。

ONE WORLD：文法の説明（中１）40、64、88、110～111ページ、計４回・５ページ。簡略な説明のみで問題はない。(中２）30、60、82、104ページ、計４回・４ページ、(中３）38～39、80～81ページ、計２回・４ページ。(１～３いずれも巻末に文法のまとめはない。ただし３の巻末には文法の説明も表記もないが、中学で習った全タイプの英文が訳文つきで並んでいる「重要英文・総復習リスト」４ページがついている。)

SUNSHINE：(中１）25、39、55、69、85ページ、計５回、ただし各々の長さは３分の１ページ程度でほとんど一覧表のようなものが出ているだけである。その代わりに巻末資料の中に計４ページの「文法のまとめ」がある。しかしここでも簡略に説明があるだけで、問題などはない。(中２)、15、21、29、43、51、59、69、77ページ、計７回と回数は増え、出てくる間隔は短くなるが、１回のまとめはさらに短く、３行程度のところもある。巻末のまとめは４ページ。(中３）13、21、29, 47、53、63、71ページ、計７回、巻末のまとめ計４ページ（傾向は中２と同じ)。

COLUMBUS：(中１）34、56, 77、98ページ、計４回・４ページ。各ペー

ジ末尾に４問の簡単なチェック問題が出ている他、grammar huntという課題で今までの課を再読して扱われている文法が使われているかを探させる。巻末にまとめはない。（中２）12、34、45、59、81ページ、計５回５ページ。傾向や問題は１とほぼ同じ、巻末にまとめはない。（中３）26－27、50、59ページ、計３回・４ページ。１とほぼ同傾向だが、問題数は５問、２問、５問になる。巻末に８ページの文法のまとめ（問題はなし）がある。

TOTAL：（中１）22、38～39、58、79, 100～101, 111ページと計６回・８ページ。問題はない。（中2）18、29、42～43、64～65、86～87ページ、計５回・８ページ。回数が減り、間隔は少し長くなるが合計ページ数は同じ、傾向も同じ。（中３）32～33、42、62～63、82～83ページ、計４回・７ページで、間隔はさらに開いたが傾向に違いはない。１～３いずれにも巻末にまとめはない。

HORIZON：（中１）は文法に関しては独自のアプローチを取っていて、本文のあるページのほとんどに非常に短くはあるが、文法のワンポイント説明のようなものがある。

（e g.「主語がI, you 以外で単数の場合、動詞にはsまたはesがつく」）それ以外に「まとめと練習」という文法の説明と問題のあるセクションが20、30、54、70、77、96ページの計６回・６ページある。そこの説明はワンポイントの部分があるのを受けてか、極めて簡略な表のようなまとめであることが多く、表題も「確かめよう」になっている。問題は２タイプで合計５問程度の簡単なもので、穴埋めや書き換えなどの以前主流だったタイプが多い。（中２）でも本文下の文法のワンポイント解説システムはそのままで、「まとめと練習」は18、46、82ページの計３回・３ページある。回数もページ数も半減しているのは通常の課の間にスピーキング、リスニング、リーディング、ライティングなど専用の課が多く挟まれ、そうした課では文法を扱う部分がないからである。（当然ワンポイント解説もその分少ない）（中３）も基本的には同じ枠組み。本文下のワンポイントと「まとめと練習」26～27, 46, 64ページ、計３回４ページ。それ以外に巻末に「Book１－３基本文のまとめ」に

説明も訳文もなく文法項目ごとに今までの教科書に出てきた英文が２ページにわたって列挙されている。

CROWN：（中１）本文中に文法の説明はまったくなく、巻末の付録に１課から９課までに出てくる文法の説明が計７ページに渡ってまとめてある。各項目の末尾に２問の短いチェック問題が付いている。（中２）１同様巻末のまとめのみ計６ページ、（中３）同様に巻末のまとめのみ計６ページ。

なお文法の説明のしかたで特徴的なのは、文法用語をなるべく使わないような努力が見られることである。例えば文の種類として今まで誰も疑問を持たないで使われてきた「肯定文、否定文、疑問文」という言い方もでさえ、SUNSHINEとONE WORLDは「ふつうの文、否定する文（打ち消しの文）、たずねる文」のようにより簡単でわかりやすいと思われる言い方と置き換えているし、CROWNは説明の中では「～文」という言い方を避けて「～とたずねるとき」のように表記している[9]。

次に「不定詞」というこれも広く教科書で使用されていた文法用語だが、不定詞が初出する２年生用の教科書を見ると、ONE WORLD ２、COLUMBUS ２、CROWN ２では本文でも文法説明のところでも「to＋動詞の原形」という言い方がされ[10]、「不定詞」という言葉は出てこない。SUNSHINE ２では本文の出てくるところでは「to＋動詞の原形」のみで、巻末のまとめに「to＋動詞の原形を不定詞と呼びます」の表記がある。TOTAL ２ は本文では「to＋動詞の原形」のみ、文法のまとめの「～すること」のところにのみ「to＋動詞の原形」（不定詞）、」とある。他の「to＋動詞の原形」が使われる「～するために」、「～して」、「～するための」のところには「不定詞」の表記なし。HORIZON ２では本文の下のワンポイント説明には「to＋動詞の原形」のみだが、索引のtoのところでは見出しに「不定詞」とある。またHORIZON ３の文法のまとめでは見出しが「不定詞」になっている。以上代表的な２例から見ても、多少の違いがあっても「文法用語は極力前面に出さない」という方針があるのは明らかである。この文法の取り扱い方については後述する。

次に序論で述べた大学生のbe動詞と一般動詞の混乱について、教科書の導入順がどうなっているか見てみたい。まず入門期の動詞の導入としてbe動詞と一般動詞のどちらが先に取り上げてあるかの順番を見ると、TOTALだけが[11]一般動詞から入り、残りの５つはbe動詞から入っている。馬場(2009)(p.211）では一般動詞から導入すると「一般動詞の前にbe動詞を置く誤りを防ぐ」効果がある可能性を主張する。一般動詞の前にbe動詞を置く誤り（eg. ＊It was happened yesterday.）が多いのは英語学習の初期にbe動詞を練習することがその一因である可能性が否定できないからだとする。これは興味深い主張で、小室（2008）(p. 127）でもこうした誤りが今の大学生に顕著であることを報告した。この誤りは容易に直らないので、是非追跡調査して、TOTALを使用した学習者に本当にこの主の間違いが少ないのかを検証してほしい。他にも馬場は言語操作の容易さや多様な動詞を導入できるなどいくつか利点をあげている。それにも関わらず他の教科書がすべてbe動詞を先に導入することについては外国語学習の初期段階での活動にbe動詞を必要とする「挨拶」「自己紹介」「人やものの紹介」があるからだと言う。

CROWN発行元のウエブサイト（http：//tb.sanseido.co.jp/english/newcrown/18_qa/18_qa-c2.html#1）でもQ&Aの答として「…（中略）be動詞から導入することによって、１年初期の「自己紹介」の活動とうまくマッチし、自然な流れで導入することができるのです」と答えている。

５．その他（姓―名の順序について）

大学の授業で英語による自己紹介をさせたときに近年混乱するのが、姓名の順序である。今までの標準であった英語式の「名―姓」の順序の学生とほぼ同じくらい、日本式の「姓－名」の順序にする学生が混在し、統一性がない。(授業では「どちらでもよいが「姓－名」の順序にするのなら、どちらが姓でどちらが名か［日本が英語圏と順序が逆だと］英語で説明を加えるように、それをしないなら誤解を避けるために「名―姓」の英語式にするように」指導している)。

しかし中学校勤務時代の教科書では「名―姓」の順になっていて、そのように指導をしていた記憶もあり（それが異文化を感じさせる第一歩であった)、近年急激に「姓－名」の順番が増えたのに教科書がどのように関わっているのかを解明するべく、今回中学校の英語検定教科書でこの問題がどのように扱われているかを合わせて調査した。

その結果５種類の教科書（中１）の早い課で、日本式の「姓―名」の順の言い方が紹介されて、残った１つも「両方あって、日本人は「姓―名」の順序でもかまわない」ことが書かれていた。つまり実質今の教科書で勉強した学生なら、「姓―名」の順を選択する可能性が高く、これからもその傾向が強まることが考えられる。

ただし各社の扱い方は微妙に違い、COLUMBUS とTOTALとCROWNでは、本文で日本人が自己紹介するときに日本式の「姓―名」の順でしている。前２者はそれに対して何も説明を加えてない（それが常識であるという印象を与えるのでこれを標準とし模倣する生徒が多いことが予想される）のに対し、CROWNは本文では触れていないが、「単語・文の書き方」のところで名前を書く例で「姓―名」の順で出し、その下に「英語式にKumi Tanaka（名―姓）　と書くこともある」と説明を加え、選択の余地があることを示している。しかし見本は「姓―名」の順なので、そちらを選択する生徒が多いと思われる。

HORIZONとSUNSHINEとONE WORLDでは、本文の日本人の自己紹介では「名のみ」で姓を言わない（ので一見どの順かわからない）が、HORIZONは「名前の言い方」という囲み記事の中に「日本人が自分の姓名を英語の中で言ったり書いたりするときは　A.日本語どおりの姓―名と英語圏での順序に合わせたB．名―姓の順序の２通りあってこの教科書ではAを使います。」と両方あることを示しつつ、教科書が「姓―名」の方を選択していることである種のメッセージを発信し、SUNSHINEは説明なく、「口頭でする課題」のところの例に「姓－名」の順で書いてあるから、それに気づいた生徒はこれを標準と理解するかもしれないが、気づかない生徒も多いこ

とが予想され、その場合は生徒の自由選択になる。ONE WORLDは英語圏の人が「名―姓」で自己紹介したページの欄外に「英語圏では名―姓の順になります。日本人が自分の名前を言うときには、日本式に姓―名の順で言ってもかまいません。」と両方可能なことを示す。この6冊の中では唯一、「かまわない」と言いつつも、実際に「姓―名」の順で書いてある見本を提示しない。その意味では「姓―名」の順が標準であるとの印象を与えない。

ただし実際には教科書に書いてあるだけでなく、当然教員の指導の影響が大きいことは言うまでもない。それでは教員は信念に基づいて、あるいは今までの自分の使用してきた順序にのっとって自由に判断しているのだろうか。実はそうではないと思われる事情がある。教員（そして上記の教科書会社の方針）に大きな影響を与えたと思われるものがあるのである。それは英語教育の側からではないところから発信された。2000年12月8日に出された国語審議会の答申[12]である。「国際社会に対応する日本語の在り方」の2「姓名のローマ字表記の問題」のところに、「人類の持つ言語や文化の多様性を人類全体が意識し，生かしていくべきであるという立場から」「国語審議会としては」「日本人の姓名については，ローマ字表記においても「姓－名」の順（例えば Yamada Haruo）とすることが望ましい。」また「日本人の姓名をローマ字で表記する場合，並びに学校教育における英語等の指導においても，以上の趣旨が生かされることを希望する。」というものである。これは強制力を持つものではないが、元から英語式に変えることに否定的であった勢力を勢いづけ、大きな流れを作ったと考えられる。

6．教科書の特徴と大学生の英語力についての考察

さて様々な角度から英語検定教科書を見てきたが、これからどのようなことが言えるだろうか。簡単に言えば今の英語検定教科書は一昔前に非難され、今でも誤解されている日本の英語教育の特徴（欠点）「日本の英語教育は文法と英文和訳だけで、会話によるコミューケーションができる力がまったく身につかない」を何とか払拭しようとする努力の結晶であると考えられる。

文法中心にならないように詳しい説明や練習問題を減らす、文法用語はなるべく使わないようにする、その代わりにリスニングや口頭練習を大幅に増やしコミュニケーション能力をつけようとする。本文もそのために会話文を中心にして会話に慣れさせる、という狙いがあると思われる。

海外の先端の語学教育の研究の流れからいって、この方針転換は方向として間違っていない。日本の英語教育の最も優れた研究者のほとんどが、中学英語検定教科書の著者であるのだから当然である。しかしこれで日本の英語学習者が英語のコミュニケーション能力が飛躍的に伸びてきたという話は聞こえてこない。それどころか逆に基礎的な英語力が身に付いていない学力低下問題が起こっている。これはどう考えるべきであろうか。この点の実証的な検証はすぐには難しいが、この研究でも見てきたことの中に原因として考えられることがいくつかある。その点を考察してみよう。

１つには会話文中心になったことと、総語数の減少の問題である。本論でも述べたが、教科書の中の会話は特にturn takingが多く、短い内容の文を交互に発信する形になる。もともと口語と文語の違いとしてよく指摘されるのは、「口語より文語の文は構造が長く複雑で、語彙も難しくなる」ということである。当然複雑な内容や深い思考を伴う言語処理は、口語ばかりでは難しいことになる。その意味では今の教科書の短い会話文は、そういういわば「根」の部分が育たないのではないか。また入門期でそうした英語に慣れていると高校などで長い地の文が出てきたときに、拒絶反応を起こすのではないか。

次に総語数の少なさが気にかかる。本論でも「1988年と現在の教科書の比較をあげ語数が7,725から6,148と1,577語減っている」ことは述べた。しかし馬元（2005）（p.6）によれば「1950 年代の代表的な教科書であるJack and Betty は１年生用で4,702 語、２年生用9,109 語、３年生用では10,361 語、中学校３年間では（総語数は）24,172であった」とされる。1988年でさえ50年代の３分の１以下であったことになる。どちらが適切な語数なのであろうか。投野（2008）（p.12）によれば「（中国、韓国などの）アジア諸国の中学英語は、

日本の語彙量の２～３倍、接触するテキスト量は３～５倍に上る。」とある。近年のアジアの英語教育が日本をしのいでいることは学習者のTOEFLなどの点数からも明らかである。そうなるとこの総語数の少なさと、しかもそれが短い会話文ばかりであるということが英語学力低下の大きな原因の一つと考えられないだろうか。中学校勤務時には教科書以外に多くの副読本を読ませた。しかし現在では夏休みなどに副読本を読ませることも極めてまれになったと聞く。次回の検定でいくらか語数が増えることが期待されるが、それではとても足りないと考えられる。やはり副読本などの教科書以外のもので補うしかないので副読本の復権が待たれる。

次に文法の扱いが激減したことについて考えたい。確かに用語の説明だけわかっていても使えないので、以前のような形に戻す必要はない。しかし基本的な構造や用法の知識がある一定のレベルより下回れば応用できず、コミュケーションの障害になることは明らかである。(文法能力はコミュニケーション能力の構成要素であるのだから）そういう意味では今のままでは文法教育として不足である。パターン別の英文を意識させること、そしてそれを自分で作って（口頭でもよいから）発信する練習を多く取り入れる必要があると思われる。(つまり説明はともかく作業、それも部分的な穴埋めなどではなく、文全体を生成するものを多くすることが望ましい）また過去形・過去分詞形などの暗記が不可欠であるので、この点も反復して記憶できるような課題が教科書にほしい。

7．まとめ

現在の大学生などの英語学習者が入門期に利用している英語検定教科書から得られる情報や教科書を多角的に検証した研究が不足しているのを補うべく全英語検定教科書の３年分の検証を行い、英文の質の変化、使用総語数の減少、文法の説明や問題の減少など以前の教科書とは様変わりした様々な特徴を整理して列挙した。その特徴から行われている英語教育とそれの与える影響を考察した。このまとめの最後にあれだけリスニングやスピーキングの

活動があるのに学生の会話能力がほとんど伸びていないことについて仮説を考えてみたい。

もちろん１つの可能性としては教員がまだ新しいやり方に慣れていないために旧来のやり方を踏襲し、実際にはああした活動が十分に行われていないことが考えられるが、もう一つの可能性を考えたい。それは小室（2004）でも取り上げた「コミュニケーションの目的」の問題である。Widdowson（1978）（p.3）は同じ言語操作でも、「コミュニケーションの意図」のない機械的なものをusageと呼び、コミュニカティブな言語操作とは違ったプロセスを持つものと予想し、目的のあるuseの導入が不可欠であることを主張した。それに対して小室（2004）では、information gapがある言語活動（教科書の多くのペア・ワークやグループ・ワークがそれに該当する）であって、目的があるとされるものでも、それが「真の自発的な伝達意欲」を伴わない（＝授業の課題のように外から与えられた）場合、あるいは情報を得ることの必然性が感じられない、得られた情報に関心がないなどの場合は、本来のuseとは別物になり、やはりコミュニケーション能力が育たない可能性を示唆した。ここで重要なのは外側ではなく、学習者の意識の問題である。外から与えられた目的を自分の目的と感じられる能力、その活動をおもしろいと思える能力が必要なのではないだろうか。それがあれば「他発的な伝達意欲」を「自発的な伝達意欲」に変換でき学習の効果が得られる。そう考えると、何故形式的にはuseの要件を持っている活動を行ったときに会話能力が伸びる学習者とそうではない学習者がいることの説明がつく。

意識の内的なプロセスが絡むので、このことの検証は容易ではないが、例えば同じ活動を行ったのに会話能力の伸びた学習者と伸びなかった学習者がどのような意識でその活動を行ったかのアンケート調査を行えば、その傍証になるのではないだろうか。

そういう意識になるためには想像力があることが助けになると思われる。そういう想像力をつける一つの方法が「演技指導」だと思われる。本来悲しくなくても俳優は脚本に悲しい場面があれば（外から与えられた他発的なも

の)、人が見て胸を打つような悲しい演技をする。もちろん学習者は俳優ではないが、役に入り込むことを強く意識することで、ふだんでよりはずっと感情的に入りこむ（またはしらけない）ことは可能だと思われる。

研究の次の段階では上記のアンケートと共に、そうした「演技指導」を入れた教育方法を探っていきたい。

[1] 教科書検定の主な根拠法令は　学校教育法第34条、第49条、第62条、第70条、第82条、及び文部科学省設置法第４条第10号

[2] 検定を申請せずに独自基準で発行される非検定教科書もある。主なもとして次の３つがあげられ、一部私立学校などで使用されている。

(1) Progress In English 21（エデック社）著者：ロバート･M・フリン
1966年に発刊、関西のカトリック系の中高一貫校で使用され、次第に全国の私立学校に広まった「Progress In English」シリーズを改定したもの。音声からの導入を特徴とし、基本的な会話表現の習得を目指す。Book1から6までの６冊編成（Book4以降は高校用)。標準的な使い方としては、中学校では、Book1が中１／Book2が中２／Book3が中3だが、内容的にはBook2までで中学範囲をカバーしているので、学校によっては中学３年間でBook2までしか使用しないところもある。

(2) Treasure（Ｚ会出版）編者：中高一貫英語教育研究会
2003年に初版が発行され、首都圏で採用校が増えている。音声重視・会話重視の作りで、生徒が親しみやすいようなイラストや簡単な作業問題がある。文法のまとめもわかりやすい。

(3) Birdland Junior English（文英堂）監修：吉田研作
特徴としては①「やさしく楽しく学べる」よりも「確実に深く学べる」②英文法を基本としながら、「読む・書く・聴く・話す」という４技能の習得に配慮している。

[3] 2006年度より中学教科書は新課程に移行

[4] もう１種類検定教科書として秀文館より発行されていたTotal Active Communication 1・2・3があったが、2006年度（平成18年度）より発行を停止

[5] ふきだし方式はHORIZON,CROWNが３課まで、TOTALが３課の前半（a）まで、SUNSHINE が２課まで、ONE WORLD が１課まで使用している。

備考：教科書の１課、２課の「課」の言い方が教科書によって違う。「Lesson」を使っているのがCROWNとTOTALとONE WORLD（ただしONE WORLDではLesson３つごとにUnitというまとまりがあり、混乱しやすい)、「Unit 」を使っているのが

HORIZONとCOLUMBUS。SUNSHINEは独自路線でＰrogramを使用している。本論では共通化するために１課、２課と「課」で表記することとする。

[6] ただしCOLUMBUS は11課のextra に短い手紙文があるだけでreading 用の読み物はない。CROWNの読み物は会話文が多く含まれたもの。SUNSHINE だけはReading の読み物の後に１ページの補充Readingが４ページついていて会話文以外の英語を補おうとする姿勢が見られる。が、「補充」の表記であるので正課として授業で扱わなくてよいようにも取れる。またその前のReadingの読み物自体に「付録」の表記があり、扱うかどうかは教員が自由に選べる雰囲気になっている。

[7] ただしCOLUMBUSには795wordsの内容の深い読み物「Changing the World」がSpecial Program のFurther Readingのセクションにある。

[8] 次回の指導要領では必修語の指定は廃止になり、総語数は900語から1200語に増えることを受け、次回の改定からは教科書の語数も増えると予想される。

[9] ただし問題では「疑問文」という言い方は出てくる

[10] ただしCOLUMBUS 3の最後の巻末のまとめには「不定詞」と出てくる

[11] ただしTOTALは１課(p. 15)の始まる前の「英語のあいさつ」(p. 6～7)「英語を話そう！」でbe動詞が使われている。これは１課の後に導入するのか、丸暗記のように覚えさせるのかちょっとわかりにくい

[12] 巻末資料２に全文を掲載

参考文献

馬本 勉　2005.「英語教科書の計量的分析」 2005. 5．14　日本英語教育史学会第21回全国大会シンポジウム「戦後英語教科書の歴史と展望」発表資料

小室俊明　2004.「コミュニカティブな言語活動の問題点とイメージ力の利用」『語学教育研究論叢』第21号. pp.153-165.

小室俊明　2008「低学力時代の大学生の英語の誤り」『語学教育研究論叢』第21号. pp.113-131.

瀬谷廣一 2002.「平成14年度版中学校英語教科書〈教科書別・学年別・品詞別〉語彙分析統計　http://www.eng.ritsumei.ac.jp/seya

投野由紀夫　2008.「アジア各国と日本の英語教科書比較」教育再生懇談会会議資料」2008年５月16日　発表資料

長谷川修治，中條清美　2004.「学習指導要領に伴う学校英語教科書語彙の時代的変化」*Language Education & Technology*。第41号　pp.141-155.

長谷川修治、中条清美、西垣知佳子　2008.「中・高英語検定教科書語彙の実用性の検証」

『日本大学生さん工学部研究報告B』第41巻　pp.49-56.
馬場哲生　2009.　「中学校英語検定教科書における文法項目の配列順序」『東京学芸大学紀要　人文社会系　Ⅰ』 vol.60 pp209－220.
Widdowson, H. 1978.*Teaching Language as Communication.* Oxford:Oxford University Press.

巻末資料１．平成17年検定済み英語教科書一覧

名　称	著　者	出版社	価　格
＊NEW HORIZON English Course　1・2・3	笠島準　他53名	東京書籍（株）	各293円
＊SUNSHINE ENGLISH COURSE1・2・3	佐野正之　他34名	開隆堂出版（株）	〃
＊TOTAL ENGLISH　1・2・3	堀口俊一　他19名	学校図書（株）	〃
＊NEW CROWN ENGLISH SERIES New Edition　1・2・3	高橋貞雄　他34名	（株）三省堂	〃
＊ONE WORLD English Course　1・2・3	松本茂・伊東治己・高橋一幸　他24名	教育出版（株）	〃
＊COLUMBUS　21 ENGLISH COURSE　1. 2. 3	東後勝明　他15名	光村図書出版（株）	〃

巻末資料２

国語審議会 2000/12/08答申等「国際社会に対応する日本語の在り方」
(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/12/kokugo/toushin/001217d.htmより該当箇所全文引用)

２　姓名のローマ字表記の問題

(1) 姓名のローマ字表記の現状

日本人の姓名をローマ字で表記するときに，本来の形式を逆転して「名－姓」の順とする慣習は，明治の欧化主義の時代に定着したものであり，欧米の人名の形式に合わせたものである。現在でもこの慣習は広く行われており，国内の英字新聞や英語の教科書も，日本人名を「名－姓」順に表記しているものが多い。ただし，「姓－名」順を採用しているものも見られ，また，一般的には「名－姓」順とし，歴史上の人物や文学者などに限って「姓－名」順で表記している場合もある。欧米の報道機関等では，日本人自身の慣習を反映して「名－姓」順で表記することが一般的である。

しかし，近年では，本来の形で表記すべきだとする意見も多く聞かれ，名刺等の表記を「姓－名」順にしている人なども見られる。文化庁の「国語に関する世論調査」（平成11年）では，中国人や韓国人の名前は英文の新聞や雑誌の中でも自国での呼び名と同じ「姓－名」の順に書かれることが多いことを述べた上で，英文における日本人の姓名表記について尋ねたところ，「「姓－名」の順で通すべきだ」（34.9％）とした人がやや多く，「「名－姓」の順に直すのがよい」（30.6％），「どちらとも言えない」（29.6％）もこれに拮抗する結果となった。

(2) 姓名のローマ字表記についての考え方

世界の人々の名前の形式は，「名－姓」のもの，「姓－名」のもの，「名」のみのもの，自分の「名」と親の「名」を並べて個人の名称とするものなど多様であり，それぞれが使われる社会の文化や歴史を背景として成立したものである。世界の中で，日本のほか，中国，韓国，ベトナムなどアジアの数か国と，欧米ではハンガリーで「姓－名」の形式が用いられている。

国際交流の機会の拡大に伴い，異なる国の人同士が姓名を紹介し合う機会は増大しつつあると考えられる。また，先に記したように，現在では英語が世界の共通語として情報交流を担う機能を果たしつつあり，それに伴って各国の人名を英文の中にローマ字で書き表すことが増えていくと考えられる。国語審議会としては，人類の持つ言語や文化の多様性を人類全体が意識し，生かしていくべきであるという立場から，そのような際に，一定の書式に従って書かれる名簿や書類などは別として，一般的には各々の人名固有の形式が生きる形で紹介・記述されることが望ましいと考える。

したがって，日本人の姓名については，ローマ字表記においても「姓－名」の順（例えば Yamada Haruo）とすることが望ましい。なお，従来の慣習に基づく誤解を防ぐために，姓をすべて大文字とする（YAMADA Haruo），姓と名の間にコンマを打つ（Yamada,Haruo）などの方法で，「姓－名」の構造を示すことも考えられよう。 今後，官公庁や報道機関等において，日本人の姓名をローマ字で表記する場合，並びに学校教育における英語等の指導においても，以上の趣旨が生かされることを希望する。